

尾瀬

第15号

尾瀬の自然を守る会

パイプライン着工さる

尾瀬の観光地化へ一步前進(?)か

昨年夏以来くすぶり続けていた、尾瀬ヶ原東端見晴集団施設地区の、し尿污水排水用のパイプライン工事が今シーズンオフを期にはじまつた。年間数十万人が訪れ、宿泊者の多くが身を寄せる見晴地区においては、日々排出されるし尿・污水の量は莫大なものである。現に、排水溝沿いのヨシ・リュウキンカは以前に較べて極めて背が高くなっている。貧栄養をもつてその特徴とする尾瀬ヶ原高層湿原であるが、徐々に富栄養化して、その存続も危ぶまれている。この危機を打破せんと計画されたのが今回のパイプライン計画である。

そもそも、事のおこりは遠く一九七二・三年頃にまでさ

かのぼる。高度経済成長計画のありをうけて、各地で観光開発の嵐が吹きあれ、その影響が尾瀬にも及び、秘境をもつてその分となっていた尾瀬に、各方面からの車道がせ

まつた。そのため、ここを訪れる人々は年を追う毎に上昇し、年間十万のケタの大台へ

と達した。

そして、それらの人々は、ヒトである限り「食べ」そして「排出」をする。少人数による「いとなみ」であるうちには、尾瀬という大自然の生態系の中ではとるに足らないものであろう。

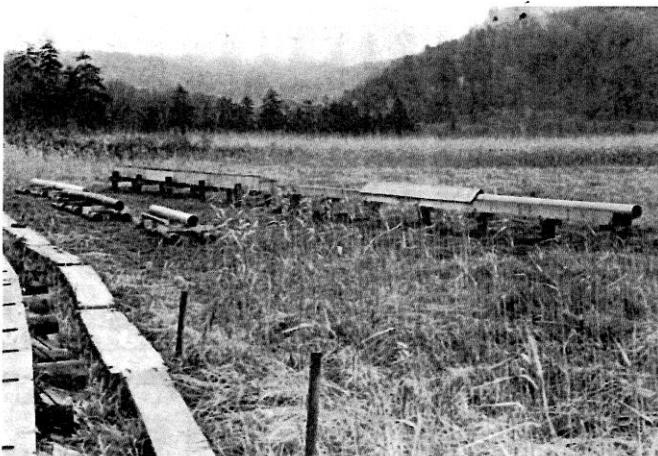
しかるに、万を超える人々が、きわめて限られた期間に集中して訪れるようになると、そろはいかなくなる。しかも、

見晴地区には、山小屋が六軒もある。それは、見晴地区が尾瀬のほぼ中央に位置し、また、尾瀬のメインストリートの真中にあるからである。宿泊定員は、一千人を超える。それが、シーズンの最盛期には倍近くになる。それらの人々によるし尿・食事関係

そこで、事を重くみた福島県は、一九七二・三年頃より実態調査をくり返し、一九七七年、つまり昨年夏に至つて、環境庁・見晴地区的六軒の山小屋とも協議のうえ、し尿汚水処理パイプライン計画を打ち出した。

それによると、総工費約一億四千万円(本年十一月上旬に、本会会員が環境庁へ行って得た情報によると、各山小屋負担二千万円×六、福島県三千万円、国四千万円の計一億九千万円とのこと)をかけ、各小屋およびキャンプ場毎に浄化槽を設けて净化し、見晴西端(湿原際)に集め、そこから延長八七六メートルのパイプを湿原中に敷設して、東

の排水・フロ・洗顔・歯みがきによる排水の量は言語を絶するものである。



1978年11月19日 撮影

であるが故に、問題が真剣か今ここで問題となつてゐる

見晴地区には、

このようない、より多くの人々が足を向ける所である。

尾瀬においては、人々が「食べ」、「休み」、そして「排出」できる所は限られている。

このようない、より多くの人々が足を向ける所である。

それらの排水を一手に引きうけているのは、尾瀬ヶ原湿原の中を流れる、巾わざか一メートル足らずの川である。大雨がふればあふれだす。貧栄養で四苦八苦している高層湿原に、豊かな栄養を供給してくれる。しかし、この栄養は高層湿原にとつては命とりである。

そこで、排水を一手に引きうけているのは、尾瀬ヶ原湿原の中を流れる、巾わざか一メートル足らずの川である。大雨がふればあふれだす。貧栄養で四苦八苦している高層湿原に、豊かな栄養を供給してくれる。しかし、この栄養は高層湿原にとつては命とりである。

電橋下流約二百メートルのところにある沼尻川支流へ放流する、というものである。

工事は、一九七八年から八〇年にかけての三ヶ年とし、七八年において設計、七九・八〇年の二ヶ年に渡り、湿原を破壊しないよう慎重に行う、としている。そして、今年度シリーズオフに、第一段階である設計の一つとして、バイブライン耐雪実験に着手したものである。

バイブルайнの問題点

現在進行中の、屎尿処理バイブルайнは、尾瀬においては有效・安全な最も良い方法なのだろうか。そのあたりについて検討してみたい。

× × ×

一、二千万円以上の負担を山小屋は強いられるが、風呂などの廃止を環境庁が、指導でくるのか？

二、バイブルайнから排出さ

環境庁独自で中止させられな

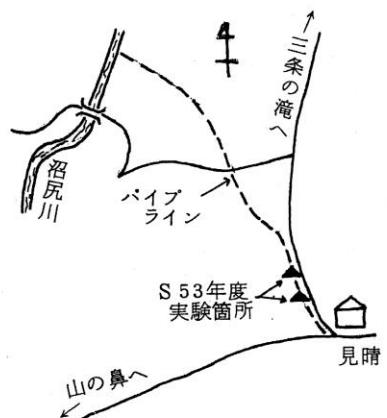
一では、二千万円も出した山小屋に風呂をやめるとは言えないだろう。又、山小屋は旅館と同じ扱いを受けるので、

× × ×

山小屋のこれ以上の増築、つまり、排水量の増加のおそれのある行為は一切認めないと

提として、見晴地区における山小屋のこれ以上の増築、つまり、排水量の増加のおそれのある行為は一切認めないと

いる。そして、今年度シリーズオフに、第一段階である設計の一つとして、バイブルайн耐雪実験に着手したものである。



いだらう。（旅館は厚生省・消防庁などに管理指導されている。）二、そもそも、浄化槽の細菌が低水温の為に、処理が完全にできない現状がある。なのに淨化槽を作り一ヶ所に集めその污水をヨッピ川にバイブを通して流す。この計画が、いかに現状を無視したものであり、ヨッピ川以降の只見川の生態系は大きく変化するだろ。又、現状の水質を保つ事は容易ではない。

三、ピートモスによる方法・燃焼式などがあるが尾瀬では不可能である。又、下水問題は他地区でも同じ事だが、下田代だけに計画されている。全山小屋で出来る方法としてヘリコプターでせめて屎尿だけでも麓へ持ち出し、下水処理場へ降す。処理場の用地については片品村・檜枝岐村の当局に検討を期待したい。以上のように尾瀬の保護の根幹に係る問題なので熟慮の上計画されたい。山小屋はこれを機会に二千万円の元を取りかえすために、今後ホテルのようにデラックス化を進めるだろう。自然是破壊され美しい

現在尾瀬で計画されているバイブルайнによる排水は、アメリカ等で効果をあげていると聞くが、それはあくまで都市排水についてであり、尾瀬とは異質のものである。今日まで、少しでも汚染を食い止めようと、洗剤やフロの使用を中止してきたが、バイブルайнの設置により、そのような努力が必要ではなくなり、多量の廃水（しかも、質的には汚染度の高い）が流れ出ることになるだろう。

さらに、今までには、排水が一つの歯止めとなり、限定されたサービスしかできなかつた山小屋経営も、（無限に近い排水可能性が故に）一変し、近代的観光地の要素を帯びてくるだろう。より快適な、よりきれいな小屋（もはやそれは山小屋とは呼べまい）の立ちならぶ尾瀬ヶ原畔など、

ていたと言つても始まらない。場当たり的な当局と、デラックス化を勧めるだろう山小屋、それを望む心ない登山者（あるいは観光客か？）。

人間によつて破壊される自然に対し今こそ謙虚に尾瀬を学ぶ態度こそ、忘れられかけている基本的な責任ではないだろうか！ 文章 林哲也

バイブルайнに対する我々の態度

現在尾瀬で計画されているバイブルайнによる排水は、尾瀬の大衆化につながることはあつても、決して保護の道へはつながらないものである。現在本当に必要なものは、保護を基盤とした、長期的視野に立つた保護利用計画の確立とその実施である。聞けば、昭和四十二年度の国立公園審議会において、見晴集団施設地区の全施設を、順次段階的に温泉小屋地区へ移動させるに決定した、という。しかし、現在に至るも全く着手されていない。実践の伴わない約束など、もはや我々は信ずることはできない。

また、微妙なバランスの上に成り立つ生態系としての自然を守るには、技術力のみに依存することなく、そこを訪れる人間の活動も制御の対象とすべきではないか。

人間によつて破壊される自然に対し今こそ謙虚に尾瀬を学ぶ態度こそ、忘れられかけている基本的な責任ではないだろうか！ 文章 林哲也

講座の全過程終了す

去る十月二十九日、東京農業大学第一高等学校において、尾瀬自然保護指導員養成の最終講座が開かれた。

当日はあいにくの雨であつたが、講師の熱弁に、受講生たちはそれを忘れて熱心に聞き入っていた。

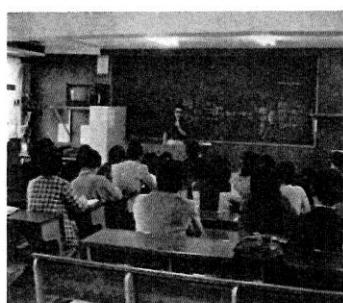
講師として、山階鳥類研究所の柴田敏隆先生を迎え、スライドなどの視聴覚機材も用いての、より実践的な問題についての講義であった。

先生御自身指導員である立場から実例をあげ、それに対するより具体的な対応の仕方、処置の仕方、さらには指導員としての根本姿勢についての講義であった。

受講生側も、これから自分自身に関することだけに、質疑応答にも熱がこもつてゐるようであつた。

確かに、自然保護指導員の養成という高次の作業のしめくくりとしては、わずか三時間のまとめでは何かもの足りない氣もある。今後は各受講生の更なる努力と活躍を切に期待したい。

このあと、全過程を終了し



た受講生、会の事務局側のメンバー計三十四名に対し代表から、指導員の身分証とワッペンが渡された。

午後にはいり、講座で得た知識などをもとにして、会の今後のあり方、今尾瀬がかかえている問題についての抱括的な討論が行われ、最後に、受講生も交えて各分担別に分れて、今後の会運営についての話し合いがもたらされた。

より多くの実践的な仲間作りを、の意図のもとに開かれたこの講座、すでに何人かの新しい仲間が活動にたずさわっている。今後とも、より多くの人々が尾瀬の、自然の重要性、その価値を認識して、私たちの仲間となつていくことを熱望したい。

尾瀬自然保護指導員名簿

太田 和、松田美代子、岸好人、内海広重、武繁春、林哲也、河内輝明、鈴木彰典、八木幸市、市川英夫、阿部秀利、内倉勲子、太田政明、片岡トモ子、阿左見正起、川谷内康子、木島司郎、坂井崇浩、佐藤新一、高野均、遠山久子、中島和人、並木岳志、西沢彰、原田泉、古見満雄、丸山正四郎、横山隆一、鷺野郁夫、渡辺郁夫、渡戸場秀幸、三枝欣司、椎名宏子、細川幸勇。

以上敬称略、身分証明書番号順。

今後の活躍を期待します。

やがなる発展を期す

自然保護の必要性が叫ばれてから久しい。しかし、尾瀬を例にとつてみてもその実績ははかばかしくない。利用者の優先の觀があり本当に自然を守る為の姿勢がうかがえない。

このような状況の中につてて、しっかりと「自然保護理念」をもつた仲間づくりをしよう、とはじめたのが、今回の「第一回尾瀬自然保護指導員養成講座」である。

次回の開講に際しては、より高次へと飛躍し、多くの仲間ができるとを切に期す。

かい指導、御助言のもと、一応成功裏のうちに終つた。だが、参加者の募集方法・選定講座のあり方など、今後の実施にあたつてまだまだ改善の余地はある。さらには、運営における予算的裏づけ、あるいは、指導員養成というハイレベルな作業を担う我々自身の質の問題等々。

○尾瀬の自然を考える夕べ
一九七八年十月二十九日
事業部発表
定順次発表
二月二十三日（金）詳
細は四ページ参照

今後の事業計画

○尾瀬自然観察会
年三回位予定、詳細未
定順次発表
○尾瀬絵画教室（夏期に予定）
講師等々力徹郎氏予
定
○第二回尾瀬自然保護指導員
養成講座（詳細次号発表）
このほか、尾瀬の自然を守
る会発足十周年（昭和五十六
年）へ向けて、「尾瀬の自然
保護展」の準備中…。

入会のおすすめ

「尾瀬の自然を守る会」は日本における自然保護運動の発祥地・原点である尾瀬において、自然保護を考え、学び、行動する「市民の会」であります。昭和四十六年八月尾瀬を通る国際観光ルート沼田一田島線建設反対運動の際に発足し、その後幾多の困難を経ながら会員の努力によつて、運動は続けれられております。

尾瀬を愛する皆さん、小さな力でも合せれば、一粒の雨滴が大河になるように大きな力となります。どうぞ、この運動にご参加下さい。そして、日本の自然を守り、いつまでも心豊かな人間生活を送ろうではありませんか。

会の活動　○会報「尾瀬」の発行　○自然観察会　○自然保護指導員養成講座　○その他、自然保護に関する調査研究、講演会など。

入会の方法　○年会費（一月一十二月）一五〇〇円を事務局へ、会の主旨に賛同する方はどなたでも入会できます。

会の事務局　田一一一一四五一一〇（大田和方振替・東京6-138023

山行報告

前号で募集の自然観察会は、人が集らずやむなく中止へ。同日程の農大一高生物科校外授業へ同行した。

九月二十五日、上野一沼田一戸倉（泊）。夕食後、映画と尾瀬の自然の解説。同二十六日、戸倉一鳩待峠一三条滝一渋沢温泉（泊）。行動中自然解説を行う。渋沢温泉においては、輪を囲んで高校生たちの話を聞く。

この山行を通じて、これらの我々の活動内容として、若い世代、小中高生へのはたらきかけを強く感じた。将来を見込した活動を…。

会のシンボルバッヂ

きまる！

等々力徹郎氏デザインによる、白を基調としたシンプルなバッヂができた。ニオイコブシの白い花を描いたこのバッヂが、会のシンボルとなるよう皆様の御協力をお願いしたい。

等々力氏は、一水会の故等々力巴吉画伯の御長男で毎年数回尾瀬へかよつて多数の絵画（主として油絵）を描かれている。

風物誌

カモシカは、ずんぐりとしている。尾瀬では東電小屋付近、大江川湿原でその姿を見ることができる。姿だけ

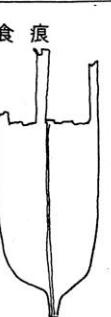


ではなく、足跡や食痕によつてもその存在を確認することができる。

足元や周囲の草木に目を向けてみよう。歩道沿いのササや木の芽には、カモシカの食べた跡、食痕が残っている。

冬から春にかけての食料の乏しい時期には、野生動物たちはこのような粗末なものをして生きつないでいるのである。

国の特別天然記念物に指定されているこの動物も、今はふえすぎて農林業に被害を与えるとして、駆除の対象



春はやく、訪れる人々のまだ少い頃、東電小屋付近を歩けば、ずんぐりとしたこのいきものに出会えるかも……。

YAGI記

編集後記

今月号のバイブルайн特集

いかがでしたか。皆さんご存知のことよりスバーリン道が、環境庁より許可があり着工され、尾瀬では道路問題が棚上げの状態。対岸の火事と安心はしてられません。

さて今月号より私と木島が

編集局に入りました。まだ仕

事は二人で半人前ですが、頑張ります。又、たくさん

の投稿をいただきましたが

紙面の都合により載せられま

せんでした。

H・A

第四回「尾瀬の夕べ」

日時 昭和五十四年二月二二三日

（金）十八時開場

会場 麻布公会堂（左図参）

講演 千葉大学教授沼田真氏

映画 「尾瀬ファンタジー」

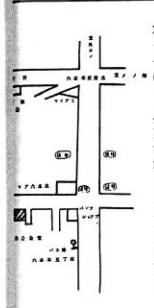
伊藤弥八氏作品他。

交通機関 地下鉄日比谷線で

六本木駅下車改札口右階段。

バスは渋谷から豊海海水産ふ頭

行又は、新橋行か東京駅行。



入会申込書	年	月	日	/
1年会員費1,500円を添えて申込みます。				
名前(ふりかな)	男 女			
現住所				
T()	自宅電話()			
M()	年 月 日 生			
S()	勤務先 電話()			

尾瀬の自然を守る会会報	尾瀬 第十五号
連絡先	東京都世田谷区深沢
発行日	昭和五十四年一月
発行者	岸 好人
編集者	河内輝明
電七〇四一二三九三	